一棗之事、大中小、一服入、此四ッアリ、寸法ノ取ヤウ有テ本圖ヲ知、奈良茶桶ト云アリ、町棗ト云有、正親町上皇ヘ擎ゲタルニハ、蓋ノ上ニ金粉ヲ以テ陰ノ菊ト桐ヲ蒔繪ニス、右此分ヲ袋ニ入ル、袋ニ入分ハ、必ズ蓋ヲ茶盌ニ並ベ置也、

一茶桶之事、面茶桶、雪吹、中繼大小極ノ挽溜、詰ノ碾溜、藥器二ッ、此分ヲ茶桶ト云テ用ユ、此内菊花ノ藥器ト云アリ、是ハ取上ル時押傾ケ、底ヘ指ヲ入テ執ナリ、櫻花モ如此、是外ニ茶桶多シト云共不用、各薄茶ヲ盛テ小座敷ヘ用ユ、尤袋ナシ、挽溜ハ勝手ノ具也、總ジテ茶桶ノ類ハ、蓋ヲ人ト盌トノ間ニ可置、各形寸式アリ、如此シテ其類多キ事、茶碗ノ恰合ニ因テ用ユルガ爲也、盌ノ緣ソリタラバ、蓋ニ面有ヲ可用、上下直ナル椀ニハ、上下ニ面アルヲ用ベシ、上下窄リタル盌ニハ、上下直ナル茶桶、上窄リナル盌ニハ、上ノ豐ラミタル藥器ヲ用也、

〔一話一言入〕或書の中に題號不見

一茶具にづんぎりといふは、頭切の文字也、棗のかしらをきりたるやうの形なれば頭切と書か、

〔茶窓閒話中〕内海の茶入は、むかしは臺子にはかざれども、小座敷へ出す例はなかりし、名物の茄子の肩衝には、必ず内海を挽溜の用に一ッづゝ添置しを、休師千利休了簡にて、やき物と燒物がさはればあやふしとて、塗物の面取を内海にかへ用ひられし、是を今の世に雪風といふとなん、左海藥師院に湯桶の茶入とて名物あり、後は赤井何がしの手へ入し、嶋ものにて、口の上に提るやうにとりてあり、手桶の蓋のごとくに合せ目を切違へて、つくもなく、二枚の割ぶたなりしとぞ、

〔茶話指月集下〕一宗易が盛阿彌に、棗は漆の滓をまぜてざつとぬれ、中次は念を入れて眞にぬれといひし、紀三與三が棗は、塗みごとすぎておもくれたり、秀次藤重をよしとす、

附、先年千宗佐物語ニ、昔ヨリ中次ハ疵アルヲ嫌フ、棗ハ厭ズトイハレシモ此意ニ合フ、